

物流ニッポン LOGISTICS NIPPON



積み替え

送がモ
送(東)

京都港区)の田中敏之社長(56)は、15年くらい前に基本スタンスをこのように転換した、と説明する。「それ以前は新聞をいち早く届けないといけない、という価値観に全社的に覆われていた」という。入社した30年余り前は「ドライバーが納品速度を競い合っていた」と振り返る。時速は一般道が80キロ、高速道路は120キロが当たり前で、スピードに

慣れ抜して緊張感保つ

店着」安定した輸送

しのぎを削る代償として「事故が多発していた」。一刻も早く販売店に届けたいとの思いに加え、警察が新聞の輸送業務を半ば特例的に扱う風潮も「スピード競争に拍車を掛けた」と述懐する。

時代の移り変わりに伴い、一般車両と同様に取り締まられるようになると、「報道機関である新聞社のイメージダウンを避ける」ことの重要性が以前よりも増す。GPS(全球定位システム)の活用を開始した15年前が実質的な転

機になつたという。

現在は法定速度の順守を原則とする姿勢を貫いており、保有する120両が引き起こす年間の事故件数は、軽微な内容の10件程度に減少している。

仕事に対する慣れを排して緊張感を保たせるため、ドライバーには毎日違う配達コードを割り当てる。更に、デジタルタコグラフやドライブレコーダーの活用と併せ、営業所長を対象にした勉強会も2014年4月から新たにスタート。事故の根絶に向け「各所長の力量と指導力」に期待を寄せる。

(沢田顕嗣)

「なぜ事故を起こしてしまったのかという原因の分析・検証よりも、どうしたら未然に防ぐことができるのか。これが最大の関心事だった」。谷口運送(安田行男社長、東京都品川区)の丸山真一取締役営業部長(56)は、ドライブレコードー(DR)導入の狙いをこう話す。

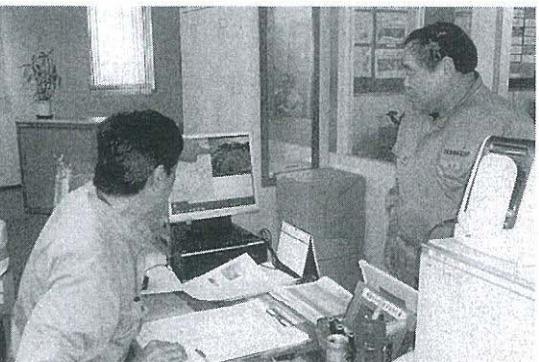
2014年6月に導入し、15年5月までに全車両110台への装着を終えた。「ヒヤリ・ハットの事例が『見える化』され、情報の共有化も実現。終業時の点呼では管理者

DR導入で情報共有化

とドライバーの会話を弾む。意思疎通が図られ、行動事故防止の『抑止力』にもなっている

同社ではDRの導入に先立ち、09年にはいすゞ自動車製の運行管理と動態管理をトータルでサポートする「みまもりくんオンラインサービス」を導入した。この二つを組み合わせながら、輸送の安全確保に取り組む。過去の事故やヒヤリ・ハットのデータを基に、ハザードマップを作成し、各営業所に水平展開。事故の未然防止や安全活動に生かしている。

谷口運送の創業は1890年(明治23年)と古い。創業以来、大手トラックメーカーのライン投入業務を担い、現丸山氏は「輸送の安全確保に継続的に取り組むことで、物流企業としての社会的責任を果たすとともに、輸送品質の更なる向上を図っていく」と意気込む。



終業時の点呼で意思疎通を図る

なくともまつとうなプライドを持つている人間になつて欲しい。そして、成長する意志を持つてもらいたい。交通事故を持つてもらいたい。交通事故のことを自身で考え、行動に移せるドライバーになつて欲しい。同時に、ドライバーの確欲しい。『やつたって何も変わらない』では、本当に何も

適正運賃 安全結びつく

在は4営業所(栃木、藤沢、川崎、さいたま)、1梱包場(神奈川県藤沢市)及び納品代行の関連会社(ロジット、日本トラック)を持つ。

直近のヒヤリ・ハットの件数は4月に8件、5月で11件、6月は10件あつたが、みまもりくんやDRの活用により、事故は確実に減少し、燃費効率も大幅に改善されてきたという。ドライバーは総勢120人を超える。

もたこておど 今後もひいひいの維持に全社を挙げて取り組んでいく。
(高橋朋宏)